
Winter Waver

小笹

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Winter Waver

【Nコード】

N3509Y

【作者名】

小笹

【あらすじ】

前世の記憶を持って生まれてきた2人の兄弟の物語。永瀬家の兄弟、黄楊きようと広葉ひろはは生まれながらにして、前世の記憶を持っている。2人は前世では生まれた時代も、環境も違っていたただけ、共通点があった。それは前世で愛し合った女性と結ばなかったこと…。

記憶

ひんやりとした空気が部屋に伝わっている。

毛布と掛け布団を全身にすっぽりと被り、静かな寝息を立てているのはこの部屋の主、永瀬黄楊だ。

彼はもうじき大学を卒業し、大学院へと進む。

今年の九月に、社会学部の学位記を授与されたことをきっかけにこの進路を選んだ。

特に就職を考えているわけではないし、黄楊自身もまだ遊び足りないと思っっているからだ。

黄楊には二つ年下の弟がいる。黄楊とは違い、真面目で努力家。

考え方も違い、自由奔放に生きている黄楊とは、それが原因で些細な喧嘩をすることもしばしばある。

もつとも、勝手に怒るのはいつも弟の方で、黄楊はというと”はい”の一言でそれを終わらせる。

この寒さのためか、黄楊は眠りから目覚めた。

なぜか頭が重く感じる。夢を見ていた所為もあるのだろう。

夢ははっきりとは憶えていないが、その中ではまた自分が弟の広葉に怒られていたような気がする。

よくできた弟だとは思っけれど、何も夢の中にまで出てきて怒らなくても、と黄楊の胸中に愚痴が漏れた。

ベッドの横に置いてあるミニデスクの上の時計を覗くと、まだ朝の八時だった。

今日の大学の講義は一時からなので、まだ時間はある。

もう一度寝ようかとも考えたが、また変な夢を見てしまつては、より一層寝覚めが悪くなるだろうとも思い、起床することにした。

起き上がった瞬間、一気に暖かったものが身体から離れ、黄楊は寒さに身震いする。

（寒っ… もう冬だな…）

月は十一月の下旬。冬はもうすぐそこまで来ていると実感させられる寒さだった。

永瀬家は一軒家ではなく、六階建てマンションの最上階だ。

そのため夏は特に蒸し暑いが、冬はどちらかというと暖かいほうである。

だが、今冬はかなり冷え込むらしく、まだ十二月にもならないというのに寒い。

黄楊がリビングへ向かうと、弟の広葉が炬燵の準備をしていた。

毎年、永瀬家は我慢し、十二月に登場していたはずの炬燵が、もうすでに出ている。

「あれ？炬燵出したんだ」

作業中に突然後ろから兄の声がして、広葉は驚いて振り返った。

「兄さん。もう起きたんだ…そうだよ。父さんが今年は特別寒いから、我慢しなくていいって」

永瀬家は両親共働きだが、特別裕福な家庭ではないため、それなりの節約をしている。

しかしそれも、この寒さではどうにもならないらしかった。

「兄さん。今日の講義は昼からだったよね？その割には早く起きたんじゃない？」

いつもは昼からの講義であれば、十時過ぎに起きてくるはずの兄に、弟は珍しいものを見るような目で言った。

永瀬広葉は、永瀬家の次男で黄楊の弟である。

この時代では珍しく、芸能人顔でルックスは良い方だが、真面目で健全な大学二年生だ。

ちなみに恋人も一度も作ったことはない。告白されても広葉はそれを徹底的に断るのだ。

「嫌な夢を見たからな。また眠れそうになかったから、そのまま起きた」

真面目な広葉とは対照的な黄楊は、そのルックスの良さと社交性で恋愛経験は豊富だった。

現在も同じ学部と同級生に恋人がいる。

そんな兄弟だから、気が合わないのかもしれない。

二人にとって、”恋愛”という価値観は常に百八十度違っている。恋愛だけではないけれど。

「その夢って、もしかして…」

黄楊の言葉に、広葉は目を大きく開いて何かを問おうとした。

その広葉の問いかけに黄楊は”何か”を察し、即座に返答する。

「お前が思っているような夢じゃないから。ていうか、お前が夢の中に出てきて俺を怒鳴ってただけ」

黄楊は広葉の目から自分のそれを逸らし、静かにそういつとキツチ

ンへ迎え冷蔵庫を開ける。

それ以降、二人は無言だった。

同じ空間にいるのに、別の空間で、それぞれ違うことを行っているように。

広葉が黄楊の”夢”を、一体どのようなものと勘違いしたのかは、当人たちが一番よく理解していた。

しかし”その”話になると、いつも二人は喧嘩をしてしまう。

それは、二人の”恋愛”への価値観の違いであった。

冷え込みの激しい中、今日も黄楊は大学へ向かう。

本当ならまだ眠気はあるし、サボりたいところだが、今日の講義は割と好きな教師のものであるため、出席したいという気持ちの方が強かった。

こういった日は、黄楊自身の機嫌は良い方だが、今朝の弟との陰鬱な空気がまだ身体に染みており、なかなか気分は上昇しない。

（まあいいか…アイツも今日は講義受けるって言ってたし…）

黄楊が思った”アイツ”とは、彼の恋人のことである。

付き合い始めてまだ間もないが、彼好みのルックスでなかなか可愛らしい。

一か月前に告白され、そろそろ彼女が欲しいと思っていた黄楊にとつては願ってもない申し込みだった。

以前彼が付き合っていた女性は、黄楊から振ったのだ。

束縛が激しく、そのくせ本人が他の男と話しているのをこちらが咎めても逆ギレするという性質の悪い女だった。

それに比べて今の恋人は、束縛も特別激しいわけではなく、これと違ってすぐに嫉妬するようなこともない。

自由な気質の黄楊にとっては、結構付き合いやすい女性である。

（気晴らしにデートにでも誘ってみるか…）

静かに揺れ動く電車の中、黄楊はぼんやりとそんなことを思っていた。

広葉は都市伝説や神話などを調べ、それを自分なりに解釈するという一風変わった趣味を持っている。

そついった類の話に興味を抱く人はごく少数だと分かっていたから、大学に入って彼の趣味にあった傾向のサークルがあると知った時は驚いた。

『民間説話研究会』。この研究会の活動内容は、その名の通り昔話や世間話などの研究だが、広葉の趣味である都市伝説や神話などの研究も行っていた。

名目的には研究会ではあるが、実はただ会話をして終わるという日も少なくない。

真面目な広葉にしてみれば、そんな一面も新鮮で、今では同じ研究会の仲間と会うことは楽しみの一つでもあった。

特に今日は仲間に出会いたい気分である。理由は簡単。

今朝の兄とのあの重い空気を忘れたいからだ。

（兄さんのバカ…）

大学の講義中も、ノートと教師を交差に見る半面、今朝の兄の態度がちらつき若干の苛立ちを覚えてしまっていた。

結局この日の講義は、あまり集中できないままに終わった。

広葉の入っている研究会の部室は、部室棟二階の五つ並んでいる部屋の内、階段から上がり一番奥の部屋である。

現在の部員は基本的に六人。幽霊部員を入れても八人くらいにしかない少ない人数での活動だ。

特に人見知りをするわけではないけれど、この少ない人数での活動が、広葉の落ち着くポイントともなっている。

「よっ！ヒロちゃん。今日は面白いネタを見つけてきたぞぉ」

部室のドアを開くと、そこには見慣れた先輩の姿と部員四人の姿があった。

それと、あともう二人は広葉の知らない女性二人がいる。

一人は短髪の女性で、もう一人は長髪の女性である。

「こんばんは、先輩。新しい部員さんですか？」

二人とも見た目からして清楚で控えめな女性だ。

広葉の先輩が言っている”面白いネタ”を見つけてきたのも、恐らくこの女性たちだろう。

「そうそう。まだ保留だが、一年生の美女お二人だ。お前の初後輩だぞ」

この研究会は、今年の四月から新入部員を募集していたが、今まで是谁ひとり喰いついては来なかった部だ。

それを考えると、一年生の部員は歓迎するところ。しかし、まだ保

留。

「はじめまして、星崎小夜といいます」

先に短髪の女性が広葉にお辞儀し、自己紹介をした。先輩が言うとおり、結構な美人である。

そしてそれにつられるようにして、長髪の女性も自己紹介をする。

「秋元すみれです」

成るほどこちらも先輩の言ったように美人である。だが、相変わらずと言っていいほど、広葉はそんな美人にも興味を示さなかった。

「永瀬広葉です。もし部内の空気が気にいったら、入部していただけると嬉しいですね」

そう広葉が言うと、すみれと小夜は顔を見合わせ再度広葉に視線を向け微笑んだ。

「私たち、今日はこの部の方たちに提供したいお話があつて来たんです」

そう小夜が言うと、広葉は先ほど先輩が言っていた”面白いネタ”のことを思い出した。

先輩の方へ広葉が視線を向けると、得意顔をした仲間たちが室内の中心にあるテーブルを囲っており、こっちへ来いと手招きしている。

「どんな話ですか？」

広葉が手招きに乗ると、彼もテーブル椅子に座り、その話に興味を持った。

「私が昔に聞いたお話です。…神話、のようなものですね」

そう言ったのはまたしても小夜だった。

「そうだ！星崎さん、お話の続きを…」

先輩が急かすように言うと、小夜は苦笑し、話し始めた。

しかし、その話をしている時、彼女の友人であるすみれは何故か一歩引いた所にいる。

「…？どうしたの？君もこっちで話を聞こう。もう君は知っているかもしれないけど」

広葉はそんなすみれのことを心配し、声を掛ける。

すると彼女は、嬉しそうに笑って彼の隣にやってきた。

「今日のそのネタ、面白かったよ。リーテ神話ねえ…初めて聞いたな」

小夜が語ったのは、パラレルワールドを題材に用いられた空想の神話物語だった。

「もう一つの地球ですか…興味深いですね」

「その話、何処で聞いたの？」

小夜に質問の嵐が巻き起こる中、ほとんど話を聞いていただけのすみれは部室のドアのすぐそばに控えていた。

もう時刻は午後六時。冬ということもあって、辺りは既に暗かった。もしかしたら、暗くなっていることで帰りが少し不安になっているのかもしれない。

「秋元さん」

広葉は、少し不安そうな表情を浮かべていたすみれに話し掛けた。

彼女はまたしても思わぬタイミングで話し掛けられ、今度は少し驚いた色を見せる。

「是非、また来てくださいね。…もしかしたら、今日は付き添いで？」

何となくだが、すみれは小夜の付き添いで来たように感じられた。

「はい…あまりこう言った話はしなくて…あっ！退屈って意味ではないんですけど…」

やはりそうだったか。でもこれを機に、こういった世界に触れるのもいいかもしれない。

なかなか踏み込めない特殊な領域ではあるけれど…。

「人によつて、考え方は色々ですから強制はしませんけど…個人的な意見を言えば、とても楽しいですよ？」

素直に自分の意見を述べると、すみれは少し考えた顔をした。

しばらくして、彼女は答える。

「それじゃあ、入ってみようかな…」

それは独り言のようだったが、それでも確かに入部の意を表したものだ。

午後十一時過ぎ。兄弟は今朝ぶりに顔を合わせると、何気ない顔で話し掛けてきたのは兄の方だった。

「ただいま。父さんは？」

永瀬兄弟の父親は朝から夕方まで働いている。

母親は夕方から深夜までの仕事なので、帰っていないことは知っていた。

「もう寝たよ。夕ご飯、コンビニで買って来てあるから、温めて食べて」

リビングのテーブル椅子に座っていた広葉はそういうと、キッチンの方を指さした。見るとそこにはコンビニ弁当がある。

しかし黄楊はその弁当に手を付けようとはせず、テレビ前のソファに腰掛けた。

「ああ、もう外で食べてきたから……」

すると、テーブルで本を読んでいた広葉は、そっとそれを閉じて兄に問った。

「誰と？」

リモコンでテレビを付けた黄楊は、画面に集中するようにその問いに無視を決め込んだが、やがておもむろに口を開いた。

「——彼女と」

そういった途端、二人の空間はまた別の世界になったような感じがした。

そしてまた、今朝の静寂が訪れる。しかし、今度のそれは長くは続かなかった。

広葉が静かに啖呵を切ったのだ。

「相変わらずだね…兄さん。兄さんは、”彼女”に会いたいとは思わないの…？」

広葉の言葉をまともに聞いて、それに答えると疲れるのは目に見える。

それなのに、毎回のように問われるその問いに、答えてしまうのはなぜだろう。

「くだらないな。俺は俺だけの恋愛を楽しんでいるだけ。広葉だって、顔はいいんだし？そろそろ彼女作ったら？」

二人の”恋愛”の価値観の違い。さっき広葉が言った”彼女”の正体、それは。

広葉は椅子から思いっきり立ち上がり、勢いよく兄に言い放った。

「兄さんは会いたくないのかよ！僕たちは、前世で結ばれなかった女性を、この世で見つけなきゃいけない…！それなのに兄さんは今まで、

“その女性”に対して、何も誠意を示していないじゃないか！恋人ができたと思ったら、すぐに別れてまたその繰り返し。どうしてそんないい加減な恋愛しかできないんだよ！」

この二人。実はとんでもないものを抱えて生まれてきたのだ。

物心ついた時には、もうその記憶の一部始終を思いだし、さらに中

学に上がる頃になると、一部だけではない。

全てを思い出したのだ。――前世の記憶というものを。

かといって、この二人が前世で兄弟同士だったのかと言われればそうではない。

兄弟の前世は、互いに愛しい人と死に別れ、また生き別れとなって生涯を閉じることとなってしまった。

そのため広葉は、生まれ変わったこの世界で再び前世の恋人と巡り合うことに使命を感じていた。

「きっと、彼女も生まれ変わっているはずだ！だから僕は、必ず彼女を見つけ出すっ……！」

だから広葉は、今まで幾人の女性に告白を受けたが交際を断り続けた。

それはまだ見ぬ”恋人”への誠意。しかし、そんな自分とは対照的に黄楊は真逆の行動を取っている。

愛しい人と結ばれることの叶わなかった切なさ、苦しさを、黄楊も知っているはずなのに。

だが、何度弟に同じことを言われようと、黄楊はそれに一切耳を貸さなかった。

正直、心底バカバカしいと思っているからである。

いつも問答無用で問われる弟の疑問に、黄楊が答えるのは彼にもちやんと現世で恋をしてもらいたいからだ。

前世の記憶なんて、そんなくだらないものに縛られている限り、まともな恋愛が出来る筈がない。

それを理解してほしいという願いは、いつも届かないけれど。

「そんなものに縛られているお前が可哀そうだよ」

「…っ！」

だからいつも、こんな言い方しかできない。

それでも届かない。中学の頃から、広葉の想いは変わらなかった。

二人でいる時、必ず前世の恋人の話をしていたのだから。

だからそんな彼に、兄として心配になったのだ。

このままでは、広葉は前世の記憶に喰われてしまうのではないかと。

だからもっと、自分の恋愛を見て、見習ってほしいと思っていたのに。

広葉…、目を覚ませ。前世の恋なんて、この現世では要らないものなんだ。

お前は、お前なりの恋愛をして、早くその過去を拭い去ってくれ。

黄楊のそんな願望にも似た祈りは、広葉に未だに届かない。

結局は、自分で変わるしかないのだろう。

ならば、早く変わって欲しい。その日を、切に願う。

記憶（後書き）

S u m m e r S k y はコミカルでしたが今回はシリアスです。

恋人

今年はかなり冷え込むらしい。それは都会も同じこと。

十一月下旬で秋が過ぎて間もないというのに、真冬のような冷え込みを感じる今年の寒さ。

これは、前世の記憶を持って生まれてきた二人の兄弟の寒空の下での、物語。

恋人

兄はこういう。くだらない過去の恋を、現世にまで持ち込むつもりはないと。

どうして？兄はそんな風に思っただろう。自分には分からない。兄の気持ちだ。

日曜日の民間説話研究会の部室。広葉は昨日の兄との言い合いを思い出していた。

テーブルで神話や都市伝説について語り合う仲間たちがいるなか、兄の声が木霊する。

——そんなものに縛られているお前が可哀そうだよ——

そんなもの。それは広葉の前世の恋のことである。

必ずこの現世で、見つけると誓った女性のことを、そんなもの呼ばわりするなんて。

兄にも前世で恋をした相手がいるはずなのに。

愛しい人を失った気持ちも、兄には分かるはずなのに。どうしても、考え方が違うのだろう。

答えは簡単だ。兄も広葉も、兄は兄で、広葉は広葉だからだ。人それぞれ考え方なんて違う。

頭では分かっているのだが…。

「……ばい?…永瀬先輩?」

「ああ、気にしないでいいよ、秋元さん。そいつ、たまにこうなることがあるんだ」

先ほどから様子が変わったように見える広葉に、すみれは心配したが周囲の部員は彼が時々、物思いに耽ることがあることを知っていたので、そう彼女に説明した。

兄と言い争った次の日は、ほとんどの確率でこうなる。

部員たちは、ただ単に彼が瞑想でもしているのだろうと思っているのだが。

当然のことながら、広葉は前世の記憶があることを周囲の人間に話していない。

そんなことを話しても、誰も信じてはくれないだろうと思っているからだ。

ただ、兄にだけはそれを包み隠さず言っている。兄は、広葉と同じだから。

前世に対しての考え方は違うけれど。

周りの部員に広葉のことを説明されても、すみれは彼を心配そうに見つめていた。

けれど、広葉はその視線に気付かなかった。

待ち合わせ場所にはうってつけの駅前。

黄楊は弟のことを思い悶々とした気分のまま、デートの待ち合わせ場所に顔を出した。

「遅いよ、キヨ君。大分待っちゃった…」

気分があまりよろしくない時に聞けば、少々煩わしいと思えてしまう黄楊の現在の彼女を前にし、彼は不機嫌さを隠すように笑った。

「ごめん、ごめん。家を出た後に忘れものに気付いてさ、取りに戻ってたんだ」

本当はただ、昨日の広葉の相変わらずの言いように呆れ、眠れず朝起きられなかったのだ。

考え方は人それぞれ。

そう分かつてはいるが、いつまでも現世に前世の話を持ち込んでいる広葉が心配で、叩く憎まれ口の裏にそんな彼を気遣う言葉をチラつかせるが、一向にそれも伝わらない。

「ちょっと！聞いているの？キヨ君…」

自分が考えに耽っている間に、目の前で色々と言っていたらしい恋人が、一際大きい声を出した。

その声にふと我に返る。

「ごめん！何？」

同じ学部現在の黄楊の恋人であるミホは、細い目でじつと彼氏を睨みつけていた。

待ち合わせ時間に三十分近く遅れてきたあげく、自分の話を聞いていなかった黄楊に怒っているのだろう。

ミホの視線が今の黄楊には痛く、また掛ける言葉も見つからない。だが、彼には一つだけ手段があった。

「わかったよ…。お詫びにほら、この前できたケーキ屋さん。あそこに関連してやるからさ」

「ホント!？」

甘いものに弱いミホは、ぱあっと明るい表情となり、瞳を輝かせた。ついさっきまでのあの威圧感ある細い目は、どこかに吹き飛んでいる。

(たまにはこんな恋人も悪くないか…)

今まで黄楊が付き合ってきた相手は、割と知的な”お嬢様タイプ”の女性ばかりだった。

思えば、自分にはかなり贅沢な恋人たちだったと思う。

それに比べて、ミホはどこにでもいるような平凡な女子大生。

普通の女性との付き合いは黄楊にとって貴重な経験だ。ミホとは何回かデートをしている。

しかしそれは、今までのような大人くさいものではなく、カラオケだったり、今みたいに喫茶店でのデートだったりする。

それまで、黄楊が経験したデートというのは、美術館にいたり、高級ホテルでのディナーを楽しんだりと、自分でもませた恋をしていたと思うような場所ばかりである。

思えばその女性たちは、どことなく前世の恋人と似ていたのかもしれない。

自分も気付かないうちに、実は前世の恋人を求めていたということなのだろうか？

だがそれが今回、ミホと付き合うことにより、また少しそれが遠くなった気がする。

こうしていつか、記憶さえもなくなってしまうばいいのに。

人間は、新たな人生を育むために、生まれ変わるのだから。

（広葉にも…いつかそれが分かるだろうか…）

分かってほしい。いや、分かってもらわなければ困る。

ミホの声がまた遠く彼方へ消え去ろうとしていた。また広葉のことを思い浮かべる。

前世の恋を追い求める、彼の一途な姿が。

それを掻き消そうと、軽く黄楊は頭を振り、ミホが興味を示していたケーキ屋の扉を開けた。

研究会の活動が、今日は雑談だけで終わろうとしている。

放心状態で兄のことを考えていた広葉も、途中で我に返り、雑談の中に加わっていた。

ずっと隣で自分を心配していたらしいすみれに慌てて謝罪し、今日は彼女と二人で会話することが多かった。

会話の内容は、研究会のことやそれから逸れたすみれの趣味の話や大学で起きたことなど。

色々と会話をしていくうちに、自然と笑顔が絶えなく続き、いつの間にか兄のことすら忘れていた。

「今日は楽しかったです。永瀬先輩が話し相手になってくれたお蔭ですね」

すみれもどうやら楽しんでくれたらしかった。

もしかしたら放心状態だった自分を氣遣って、話を合わせてくれていただけなのではないかと少し不安だったが、どうではなかったのだ。

「こちらこそ。楽しかったよ、秋元さん」

広葉は満面の笑みで、すみれにそう返事した。

ケーキ屋でリラックスした後、黄楊とミホは大手デパートでウィンドウショッピングをしていた。

デパートは十六階建てで、ほとんどがブティックや女の子向けのデパート中心のチェーン店である。

正直、体力は使うし、女は買いもしないのに色々と見たがるし、黄楊はあまり楽しめない。

ミホは運動派なのか、広いデパートのなかを走るように見て回っていた。

走ったかと思えば、ぴたりと止まり、気に入った商品を見つめる。

時には黄楊に”買って欲しい”と遠回しにおねだりをしてきた。

だが、直接言われていないことをいいことに、黄楊はその強請りを遠回しに断る。

貢がされるのは主義じゃない。そうこうしている内に、午後の七時を回ろうとしていた。

二人はアクセサリー店を覗いていたが、黄楊が時間に気付き、ミホを夕食に誘う。

「そっか…もうそんな時間か。じゃあ、どこで食べる？」

黄楊は、ミホがウィンドウショッピングを切り上げ、素直に夕食に同行してくれるかどうか不安だった。

けれど、その不安が取れ、ホッと一息吐く。

「そうだな…ミホは何が食べたい？」

実を言うと腹が減っているだけで、今は実際、食べられるなら何でもいいと思っていた。

どうせ自分の意見は適当にスルーされるのだから。

「じゃあ、このデパートにあるファミレスがいい！」

“はいはい”と、恋人の御所望通りの場所へ行き、今日のデートはその場で終わった。

広葉は六時過ぎには自宅へ帰ったが、黄楊は九時過ぎになってから

帰ってきた。

また黄楊が言う新しい恋人と一緒に居たのかと思うと、広葉は不機嫌になる。

一度、前世のことを言いあえば、三日間前後は気まずい空気となる。そしてもとに戻ったかと思えば、一か月も経てば再び言いあいになる。

基本的にはその繰り返しだ。

前世のことは兄弟以外には話していないので、両親にとっても時々訪れる”痛い空気”の意味は謎のままだ。

だがその内、きつとまたいつものやつだろう、と両親もその空気を気にしなくなっていった。

今日は黄楊が帰宅しても、昨日のような言いあいにはならなかった。いや、予め二人が互いを避けていたと言ったほうがいいのかもしれない。

きつと明日になれば、黄楊か広葉のどちらかが、どちらかに何気なく話し掛け、喧嘩する前の二人に戻るだろう。

頑固だけど、兄の前世の恋を大切に思うからこそ、広葉はきつく言うのだ。

兄には、気持ちには伝わらないけれど。

午前一時。今日はなかなか楽しい時間を過ごせた。

長い時間、後輩の秋元には心配を掛けてしまったようだが、その後の会話は穏やかなもので。

今日は良き夢が見られそうだ。そんな予感がする。

自室のベッドで、目を閉じ今日のことを思いだす。明日、自分から兄に声を掛けよう。

喧嘩が終わる時、いつも話し掛けてくるのは黄楊からの方が多い。

だから、たまには自分から声を掛けよう。

しばらくし、広葉は眠りについた。そこで、彼は夢を見た。

それは遠い昔の、過去の映像である。

昭和十三年。日中戦争が繰り広げられた時代。

二十二歳の若さで、戦場に向かった一人の男がいた。

その男には、二つ下の婚約者がいた。もうすぐ結婚、だったはずの

二人に訪れた突然の別れ。

永瀬広葉の、前世の記憶である。

約束

遠い昔の夢。それは広葉自身のものではなく、前世の魂の記憶だった。

昭和十三年、七月。二十二歳の男のもとに、赤紙と呼ばれる召集令状が届いた。

徴兵制度が働いたこの時代。

たとえ軍に志願していない男子であっても、戦場に出されるのは珍しくなかった。

それは家族のため、故郷を守るため、そしてお国のため。

召集令状が届くということは、むしろ男子にとっては最高の名誉である。

お国のために、立派に命を散らすために。

木の匂いがする比島の家。居間に集まった家族の面持ちは、ただ一人を除いては暗いものだった。

「兄ちゃん、どうしても行かないといけないの？戦争に行ったら、もう兄ちゃんと会えなくなるよ…」

今日、赤紙が届いた比島大助が出征するのは明後日になる。

弱気な声で大助に擦り寄ってきたのは、まだ小学三年生の妹の智子だ。

しかし、唯一明るい表情を見せた当の大助は、これまた笑顔で智子の頭を撫でる。

「何を言ってるんだ。智子、兄ちゃんはな、お国のために立派に奉公してくるんだぞ」

まだ幼い妹に、そして家族に、自分はあたかも名誉なことと明るく振る舞う。

それが最後の親孝行であり、大助の誇りだからだ。

ただ、気になって仕方ないこともある。それは彼の、将来を誓った女性のことだ。

「…千佳子さんには、何て説明するんだ…？」

大助には、結婚を間近に控えた大野千佳子という婚約者がいた。

可憐で人一倍気が強く、はきはきとした爽やかな女性。

「きっと、彼女もいつかこうなる日が来るのだと、覚悟はしていることと思います。明日、赤紙が届いたと、そう言えば、済むことで

す」

ああ、何を言っているのだろう。結婚を申し込んだ男が、その約束を破って死に行くんだ。

彼女は、こんな俺を何て言うだろう……。いつもの強かな態度で、
行つてらっしゃい”と言うだろうか。

それとも、”約束を破った！”と俺を責めるだろうか。

いずれにしても、これは国からの命令。避けて通ることはできない道だ。

誇るように笑みを湛えながら、大助は家族に就寝までそれを絶やさなかった。

明日、千佳子に会う時もこんなふうに笑っていられるかどうかは、
分からないけれど。

二人のお気に入りの場所で、午後一時に待ち合わせ。

そう約束を交わしてから五日後のその日。

赤紙を持って、大助は千佳子と待ち合わせをしている場所へ向かつ

た。

二人が気に入っている場所。それは田んぼが目の前に耕されている並木道だった。

そのなかでも二人が気に入っている大きな木がある。そこが約束の場所だ。

（今日で、この道を歩くのも終わりか…）

彼女の顔は今、最も見たいものであり、それと同時に最も見たくないものである。

だが、約束の時間は刻一刻と迫ってきて。

実は大助は、約束の時間よりも一時間も早く木の下で待っていた。理由は単純だ。

彼女を待つ、この楽しい時間は今日で終わり。最後の日くらい、自分が先に待ち合わせ場所にいて、待っていたい。

そして、少しでも出征の話をする覚悟の時間を自分に与えるためでもあった。

大助は一度、二十歳で迎えた徴兵検査で不合格となっている。

その時、大助は腹膜炎になったり、風邪をこじらせたりと色々と身体的に不具合があったためである。

その頃は、千佳子と付き合い始めた頃だった。

思えばあの時、健康体であつたら、徴兵検査に合格していたかもしれない。

あの時であればまだ、別れるのは今よりも辛くなかつたはずだ。

「大助さん！」

千佳子がやってきた。五日ぶりに会つのが、相当楽しみだつたのだらう。

彼女は喜色満面の笑みを浮かべ、大助の名を呼んだ。

そんな無邪気で、清々しい君の笑顔を見られるのも、もう終わりだ――。

「…どう、して…？」

晴れやかな空の下。千佳子が婚約者から聞いた言葉は残酷なものだった。

そして、言葉と共に彼女の視界に入つたのは、薄い赤い紙…召集令状である。

頭の中がぐちゃぐちゃになって、何が何だか分からなくなる。

召集令状の紙面に書かれている名前は、「比島大助」。婚約者の名であった。

茫然と立ち尽くす千佳子に対し、大助は無表情で彼女を見守る。

昨日、家族に見せられていたはずの笑顔が、彼女の前で出ないのはなぜだろう。

「徴兵検査では…不合格だった、はずなのに…」

しかし最近になって、赤紙の発行数は多くなってきたことは、噂になっていた。

まさか自分にそれが来るなんて思ってもみなかったけれど。

「お国は、俺を必要としている…だから——」

「生きて帰ってきて！」

大助が言葉を紡ぐ前に、千佳子がそれを遮り、大きな声で叫ぶように言った。

俯いていた顔をバツと上げて、目には涙を溜め込んでいたが、それでも曇らぬ声で続ける。

「あなたはっ…必ず帰って来てくれるでしょう！？…生きて帰って来ると、私と約束して下さい」

真つ直ぐな瞳が、大助の瞳を射抜くように見つめてきた。

たかが口約束。されど、その約束は”命”という重さを持った、大切な約束となった。

彼にとつても、彼女にとつても。

しかし本当のところ、大助はこの千佳子の言葉に、首を横に振りた
い思いでいっぱいだった。

出征して、生きて帰って来る者など、ほとんどいないからである。

（それでも俺は…）

首を縦に振った。彼女への慰めではない、自分への戒めである。

戦場で死ぬな、と。自分に言い聞かせ、必ず生きて彼女のもとへ帰
つて来ると。…必ず。

あれから、二年という歳月が流れた。中国へ出征を命じられた大助
は、幸いなことにまだ生きていた。

しかし、彼が生きている場所は、死地同然。いつ死んでもおかしく
ない状況にある。

そんな中、大助の身体に異変が起きた。夜中に大量の汗を掻き、微熱が続き、咳を込むようになる。

医師から告げられた病名は――…結核であつた。

皮肉なことに、この病名を告げられた数日後、大助は日本へ帰国。

千佳子との”生きて帰って来る”という約束は、果たされた。

しかし、こんな身体ではもう、彼女を幸せにすることなどできない。

それにもう二年も時は流れている。

もしかすると、彼女は別の男性と結婚し、幸せな生活を送っているかもしれない。

といつても、戦時中であるため、”幸せに”という可能性はあまりに低いが。

「大助…よく帰ってきてくれた…！」

自宅の布団で、横たわっている大助を、母親は涙目で見つめていた。

しかし、病気は不治の病。数年後には命を失うと決まっている病だ。

それでも母は、息子の生還を喜んだ。この二年間、彼のことを思い、眠れない夜もあつたという。

家族が、自分がこんな身体になって帰ってきてても、喜んでくれてい

る。

それは、本当に嬉しいことだ。…だが、大助にはもう一つ、気がかりなことがある。

「母さん…千佳子は、千佳子は今、どうしているんですか…？」

よもやこんな身体になってまで、彼女と一緒にになりたいなどとは言えない。

けれど、今彼女が一体どう過ごしているのかは、聞きたかった。

せめて、彼女が元気でいてくれさえすれば…。そう思い母に千佳子のことを問う。

しかしなぜか母は、千佳子の名を聞いた瞬間、顔色を変えた。

どこか言いにくそうな、苦しいような表情になった。…千佳子は？

「千佳子さんは…あんたが中国へ出征してから、心労を患ってね…」

「…！…それで、それで千佳子は怎么样了！？」

嫌な予感がする。母の言葉に衝撃を受けた大助は、横になっていた身体を勢いよく起こした。

結核の症状とは関係の無い冷汗が、背中を伝う。

…大野千佳子、享年二十一。死因は心労による精神的、身体的衰弱であった。

彼が出征によりいなくなっただろうど一年ほど経った冬。彼女は息を引き取った。

とても安らかな眠りとは言えなかったと、後で千佳子の両親から聞いた。

彼女は、大助がいなくなっただその日から死ぬ日まで、ずっと大助の名を口ずさんでいたという。

「千佳子……！……約束を、生きて帰って来るといふ約束を……俺にだけ残して先に逝ったのか……！」

彼女の遺影が飾られている仏壇の前で、大助は泣きじゃくった。

しかし、自分が彼女を死なせたようなものだ。こんな自分が憎い。

自分と出会わなければ、千佳子は今頃、まだ生きていたはずだ。

こんな、死に損ないの生死に悩み苦しむことなど、なかったはずだ。

「千佳子……！……ごめん……っ」

「大助さん……」

仏壇の前で、千佳子に語りかけていると、彼女の母親が大助に話し掛けてきた。

そしてその両手には一通の手紙があった。

「千佳子が、あなたに宛てた手紙です…。母の私に託していったものです…」

そう言っつて、千佳子の母親は大助にその手紙を渡した。

あなたが元気で再び故郷の大地を踏むことを、切に願っております。

戯言ですが、私の願いを聞き入れてくださいますでしょうか。

一つだけ、約束して下さい。

最後まで寿命を全うすること。

今度は、平和な時代でお会いできることを願っております。

手紙の内容は、短いものだった。

それでも彼女が自分に何を伝えたいのか明確に分かるものだった。

そして、どれだけ彼女を自分の所為で追い詰めてしまっていたのかも、痛いほど胸に突き刺さる。

涙が滲み、手紙にそれが零れた。文字が少し滲み広がる。

“男が泣くなんて、情けないっတာらないわ”。生前の彼女の言葉が木霊する。

（また俺に、約束だけを残して…）

この時の誓いは、大助自身の結核が末期となり、息絶えるその瞬間まで、一瞬たりとも忘れなかった。

涙を瞼に滲ませながら、広葉は静かに覚醒した。

（千佳子さん…）

前世の遠い夢を見ていたのだ。

それはまるで、忘れてはならない、と言いたげに定期的に見せられるものである。

時は平成。この時代は平和だ。この時代であれば、必ず彼女と幸せになれる。

あの日の約束を、今度は彼女の隣で果たす。自分一人だけ果たす約束は、もう嫌だから。

必ず、君を見つけてみせるから。

前世の記憶が鮮やかに蘇る度、広葉の決意は固いものとなっていく。

平和なこの世で、まだ見ぬ”彼女”と、巡り合うために。

約束（後書き）

転生すんの早くね？というツッコミはなしということぞで（笑）

現世

生まれ変わって、必ず彼女を見つけ出す。

そして今度こそ、彼女と手を取り合って、幸せになる。

それが広葉の、前世の約束――。

十二月に入り、冬休みも近いということで、民間説話研究会ではある一つの行事を企画していた。

二年生の広葉はまだ、数回しか経験したことはないが、この研究会では夏休みと冬休みを前にすると、ある行事を行う。

「上映会…ですか？」

すみれがぼかんとした表情で広葉の先輩に問った。

「そう、上映会！レンタルショップで民間説話と何らかの関わりを持ったDVDを借りてきて、この部室で一日上映会を行います！」

広葉とすみれの先輩は勢いのある弾んだ声で、大方の説明をすみれと小夜にする。

“研究上映会”と命名されているこの行事は、冬休みに入る前日に行われるものだった。

三、四本の民間説話と関わりを持つDVDを、上映しよく観察し、最終的に個人的な感想や意見をレポートにして部長に提出する。

提出期限は冬休み明け。そこで集められたレポートの内容を格付けし、上位に挙げた部員は下位だった部員に罰ゲームを与えるという、スリルな内容である。

「罰ゲーム…下位だったらどうしよう…」

“罰ゲーム”というルールに注目したすみれは、青い顔になった。

自分も最初の上映会の時はどうなることかと思い、こんなふうに青ざめていたな。

そう思いだした広葉は、すみれにコッソリと助言をする。

「大丈夫ですよ、女性部員にはそんなに恐い罰ゲームは与えないですから！」

“楽しくやろう”と、付けくわえ、すみれの不安を解消させるように言う。

すると、広葉の言葉にすみれも安心したのか、青ざめていた顔はぱっと明るくなった。

「そうですね…楽しくやらせていただきます…！」

普段は大人しく、なかなか表情の変化は乏しいすみれだが、今回は稀に見る目を細めての笑顔。

（こんな笑顔も見せるんだ…）

そんなすみれの表情の変化に、広葉は少し意外に思う反面、驚きもした。

部室内は今日、冬休み前日に行われる上映会の話で盛り上がった。

どんな映画をチョイスしようかとか、何時から始めようかとか…”あの夢”からは想像もできない程、平穏な日であった。

そしてあつという間に、冬休み前日を迎えた。

兄の通っている大学とは別の大学に通っているため、兄との冬期休業の日程とは若干のズレがある。

兄の黄楊は十二月の二十七日からだが、広葉の大学は二十二日からだった。

「でも、どうして冬休みの前日何ですか？春休みの方が期間は長いのに…」

大学の春休みは長い。そう言われれば確かにそうかもしれないが。

「期間の長い夏休みと、期間の短い冬休み明けに出すレポートを比べられるんです。…どれだけ雑なのか…とかね」

実際、広葉が一年の時、この独特な夏休みと冬休みの時間の差に圧倒され、自分でも上出来だと思ったレポートを夏休み明けに出したが、その後の冬休みのレポートは散々だった。

前のレポートと比べられ、評価が下げられることケースはかなり多いという。

初めての上映会を迎える部員は、大抵そうなる。

「でも、秋元さんと星崎さんは今回が初めてだし、とりあえずは楽しんで鑑賞しようよ」

まだ民間説話の初心者であるすみれには、第一に映画を楽しんでもらいたかった。

部室内にある中型のテレビの前に、部員たちが集う。

テーブルにはお菓子や缶ビール、ジュースなども置いて、ちょっとしたパーティのようでもあった。

広葉の隣には、すみれが座りその隣には彼女の親友の小夜が座った。

すみれがこの民間説話研究会に入部してから、小夜は元々興味があったため、どんどん民間説話の知識を身に付けていっていた。

しかし、あまり興味があつたわけではないすみれは、民間説話に対しての呑み込みが遅い。

部員たちと話で盛り上がる小夜とは対照的に、すみれは戸惑いつつも部員たちの会話を聞いている、という状態なのだ。

そんなすみれを何かと気に掛けてくれるのが、広葉である。

そのためすみれは、他の部員たちと話すよりも広葉と会話することの方が楽しみだった。

もちろんそこには、民間説話の話も混じるが、全くそれに興味がなわけではないので、途中で他の会話を取り入れながらそれを話してくれる広葉が、すみれにとってはちょうど良かった。

最近になつては、すみれが広葉と会話する光景が、この部室内の一つの風景のようなものにもなつてきている。

たまに”仲良いね”とか、”付き合っちゃえば”とか、冗談交じりに言われるのだが…。

それを部員から言われる度に、すみれは広葉の表情が硬くなるような気がしていた。

実際、そういつたからかいは大学生にもなれば、軽く受け流してもいいと思う。

（真面目な人なんだなあ…恋人も作ったことないって言っていたし…）

上映会が始まり、物語がどんどん展開していく中、すみれの意識はいつの間にか画面から、隣にいる広葉へと移っていった。

横目でちらつと彼を見ると、ずっと映画に集中している。

（優しいし、穏やかだし、ちょっと固いところはあるけれど…）

素敵な人だな…と、すみれは思った。

上映会が終了したのは、午後八時過ぎ。見た映画は現代ファンタジーに該当するものだった。

「じゃあ、レポートは冬休み明けに一斉提出な。忘れたやつはそこで罰ゲーム決定だ」

得意げな顔で言う先輩に、苦笑する部員たち。広葉とすみれもその内の一人だった。

「すみれ、私この後バイトだから、先に帰るね」

いつもは一緒に帰るはずの小夜が、今日は九時からアルバイト先か

ら出勤を頼まれていたらしい。

慌ただしく自分の荷物をまとめて、”お先に失礼します”と言うと、小夜はダッシュで帰っていった。

予想以上に時間が長かったのだろう。

「星崎さん、大丈夫かな。夜道は危険だろうに…」

慌ててアルバイト先に向かった小夜を心配そうに広葉は見送った。

その言葉にすみれは苦笑して言った。

「大丈夫ですよ、小夜はああ見えても、柔道を習っているんです」

「それは凄いね！なら、大丈夫か」

最近の痴漢やチャラ男ならば、柔道を嗜んでいる女性の方が強いだろう。

「それじゃあ、秋元さんも柔道を…？」

すみれと小夜は学科が違ったため、きっとそれ以外の共通点があるのだろうとは前々から思っていた。

「いいえ。高校が同じなんです。私は、そういうのは怖くて…」

「あつ…そ、そうですね…高校が。普通そっちの方を考えるよね」

この時すみれは、少し抜けている所があるのだなと、広葉の新たな

一面を見つけた気がして楽しくなった。

くすつと笑うと、広葉は恥ずかしげに俯く。どうして笑われたのか、何となく分かったのだろう。

「永瀬先輩」

ふと、すみれが広葉を呼ぶ。俯いてもいられなくなり、”はい”と返事をしてすみれと視線を合わせる。

「途中まで、一緒に帰りませんか？」

本日もかなり冷え込みが激しい冬の街。広葉とすみれは肩を並べて歩く。

クリスマスももうじきということで、行事使用のイルミネーション、巨大なツリーなど辺りはクリスマス気分で染まっていた。

クリスマスが終われば、次は新年に向けて街はその色を変える。

「日本人って、気が早いですね」

そんな世間話をしながら、時には物珍しい店を見つけ、外からその店の様子を眺め、また歩く。

それを繰り返していくうちに、年ごろらしいある感情が二人に湧いた。

「よかったら、どこか寄り道していかない？」

「よろしければ、どこか寄っていきませんか？」

ほぼ同じタイミングで、ほんの少しだけ言い方が違うだけで、二人は互いを誘いあった。

視線が合い、二人は思わず笑ってしまう。

「それじゃあ、とりあえず夕食にしません？」

まだ夕食を済ませていなかった二人は、適当に目に入ったファミリ―レストランで食事を取ることにした。

この時、広葉は少し、自分自身を不思議に思った。

そもそも九時くらいまでには必ず家に帰る自分が、なぜこんな時間に人を誘ったのだろう。

しかもそれは女性で。今までは女性と二人きりになること自体、あまりなかった。

千佳子以外には、あまり興味がなかったから。

よくよく考えてみると、赤の他人から見れば自分とすみれは恋人同士に見えるだろう。

普段からそういった誤解すらされるのが嫌な自分が、なぜ…。

「そういえば、永瀬先輩……」

自分と視線を合わせている女性の笑みが、なぜだかとても可愛く見える。

なぜだろう…。

「あれ？父さん、広葉は…」

九時過ぎに黄楊は自宅に帰っていた。ミホのアルバイト先に寄っていたのである。

「まだ帰って来てないよ。珍しいな、広葉が九時を過ぎても帰ってこないなんて」

リビングでテレビを見ていた父は、黄楊に目もくれず時計を見ていた。

確かに、珍しい。真面目な広葉がこんな時間になっても帰ってこないということが。

「へえ…そう…」

大方、サークルの部員たちと盛り上がっているのかもしれないな。そんなことをぼんやりと考えながら、黄楊は自室に戻った。

「寒っ…」

自室は暖房を入れたばかりでまだ冷え切っている。冬は嫌いだ。

私服からジャージに着替え、ベッドに潜り込む。

布団も最初はひんやりとしていたが、徐々に温かくなってきた。

眠いし、寝たくなってきたが、どうも今日は眠りたい気分ではなかった。

（でも、眠い…）

まだ九時が過ぎたばかりだというのに、この眠気は何なのだろう。

急激な睡魔が黄楊を襲った。そう思った瞬間、意識は夢の中にあっ

眠たいのに、眠りたくない。彼がそう思ったのは、この夢を見ることになるだろうと、解っていたからなのだろうか…。

現世（後書き）

すみれさん視点も入れて。次回は黄楊の前世です（＾Ｏ＾）／

相愛

戦国時代中期。ある大名家に仕える家臣の姫に、恋した男がいた。

家臣の家来であるその男は、いずれ来る出陣に向け日々、鍛練を積んでいる。

恋に現を抜かしている時ではない。ここで手柄を取って出世し、そしていずれあの姫を…。

それは、永瀬黄楊の遠い記憶である。

永正八年、十月。季節は秋。

三村元信は二年前に戦で父を亡くし、現在は三村家の主人として、大名家の家臣である大久保家に仕えている。

武士として立派に出世し、大久保家一の家来と呼ばれるようになることを目標に、元信は今日も自分の屋敷で鍛練に勤しんでいた。

「元信…」

鍛練に励む中、元信に声を掛けてきたのは兄の京吉だ。

京吉は身体が弱く、昔から持病を患っているため、父の後を継ぐこ

とを辞退した。

「兄上、おはようございます！身体の御加減はいかがですか？」

中低音の弟の声に、兄は口元を緩め”大事ない”と言返した。

「時に元信。そなた、妻を娶る気はないか？」

最近、よくこんな話を兄にも母にも持ちかけられる日々が続いていた。

その度に元信は顔色を変え、呻きたくなる衝動に駆られる。

一家の大黒柱である以上、それ相応の身分の女子を娶り、子を産ませ、彼の後継者を作ることは必要だろう。

しかし、彼にはどうしても今は妻を娶る気にはなれなかった。想い人がいるのである。

それはもうすぐ手の届かない、遠いところへと羽ばたいていったまうのだが。

三村家が仕える大久保家には、今年十七歳となった一人娘がいた。

つまり、元信の主人の娘ということは、元信にとっては、姫様と呼ぶに値する、彼よりも高貴な女性だ。

菊姫。十七歳という若さながら、妖艶な美しさを持つ大久保家の次女である。

「私は、まだそれどころではないので…」

そう。元信は菊姫への想いを捨て切れずにいた。

しかしその想いも、もうじき捨てずにはいられなくなる。菊姫は今年冬の冬に、輿入れが決まったのだ。

相手は隣国の大名家の家臣、田辺十三郎の息子である。

実は大久保家が家臣として仕えている大名家は、その隣国の大名家と同盟を結んでいた。

それも今回の菊姫の輿入れに影響している。姫はもう十七歳。いつ結婚してもおかしくない年頃。

決して手の届かない存在だとは分かっている。改めてその話を聞くとやはり悔しい気持ちになった。

本当に、元信の一目惚れであつた。庭の花を眺めていた可憐な姿が目蓋の裏に浮かぶ。

あれは元信が九つの時。大久保家の庭の池で魚を眺めていると、ふっと横から誰かの気配がした。

蒲公英を両手に持ったその女性は、当時はまだ六つの菊姫である。

その姫が、今ではあんなにも妖艶な美しさを持って、元信の手の届かない遠いところへいつてしまう。

（菊姫様…）

菊姫は元信のことなど、気にも留めていないであろうことは重々承知だった。

けれど…。

（俺は、菊姫様が好きなのだ！）

幼い頃から積み重なっていった想いは、日に日にその想いを強く、深くしてゆく。

残酷なほどに、彼女を今まで想ってきた。顔を見る度、声を聞く度に好きになっていった。

「今日は、大久保家で菊姫様輿入れを祝つての、宴だったな…」

兄は深刻な面持ちになり、刀を振るうのも忘れ棒立ちになっていた元信の想いに気付いているらしかった。

何食わぬ顔で元信に言っているようであるが、実はそうではなく。戒めにも似た、どこか強い口調。

「姫様は、ちゃんと幸せになる」

「……」

“だから諦める”と、兄は言いたいのだろう。長年の想いは、明日の宴で終止符を打てと…。

（そのようなこと…俺にできるのだろうか…）

兎にも角にも、明日は宴。しかも、想い人が他の男と結婚するといふことへの祝いの席だ。

めでたいが、元信にとっては死ぬことよりも辛い日になるのは言うまでもないだろう。

菊姫輿入れの祝いの宴が、大久保家の広間で催された。

大久保家の主やその一家、大久保家の家来たちを含め今、盛大に行われている。

菊姫は当然のことながら上座に、一介の家来である三村元信は下座に。

表面では姫の輿入れを祝い、笑顔を絶やさずしているものの、胸中は引き裂かれそうだった。

隣の席の家来と、何気ない会話を酌み交わし、出来るだけ菊姫の姿を見ないようにした。

見てしまったら、未練はまた大きくなるだろう。

「…父上」

そんな元信の葛藤の中、華やかな宴の席でそつと大久保家主人に声を掛けたのは菊姫だった。

声を発した輿入れ前の姫に、元信以外の家来たちや一族が見ると、お菊の表情は婀娜つぽさのある妖艶な笑みを浮かべている。

しかし、その中にも何故が儚げであり、悲しげに映るのは、気のせいだろうか。

そして父である主人に、意外なことを口にした。

「元信と、話したいことがあるのです」

その姫君の言葉に、はつとした元信は今まで見まいとしていた愛しいその人へ視線を向けた。

上座と下座、別々の席に座る二人の視線が、合った。

「元信は、私にとっては兄弟のようなもの…別れの挨拶なしでは、輿入れなどできません」

騒然とした空気が宴の席に湧き起こった。

無理もない、もうすぐ輿入れするという姫が、一人の男と二人きりで話したいと言いだしたのだ。

しかし、菊姫の父である元信の主は、顔色を変えず無言で頷き、姫の申し出を許可した。

菊姫は本日の宴の席の主役だというのに、元信を連れ出して屋敷の庭に出た。

夜の屋敷内の庭は、不気味なほど静かだ。

しばらく二人は黙ったまま、暗い庭の中、佇む。すると先にその静寂を破ったのは、菊姫だった。

「元信……。ここでお前と小さい頃、よく走りまわしましたね」

「……………」

「出来ることならば、私はあの頃に帰りたい」

「……………」

「ずっと、あのままお前と、走り回っていたかった……」

「……………」

元信は何も言えなかった。いや、それ以前に声が出なかったのだ。

このように、菊姫に呼び出され、公衆の面前で”二人きりで話したい”と彼女が言った瞬間から、この恋を忘れることなど、無理だと悟ったからだ。

だが、その想いはもう届かない。

「元信。なぜお前は、大久保家の家来だったのだろうな……」

「……」

「なぜ私は、大久保家の姫として生まれてきたのだろうか…」

「……」

元信から、何の反応も帰って来ないことを知りながら菊姫は続けた。

「なぜ、私とお前は、出会ったのだろうか…」

その言葉を聞き、元信は出なかった声を無理に振り絞って、菊姫に答えた。

「私は…姫様に、出会えて幸せでありました…！」

その声は、自分でも疑ってしまうほど、弱弱しくしゃがれている。

鼻の奥がつんとして、男だてらに涙などを目蓋に溜め込んでいるのが分かる。

情けない、情けない。情けない…！

そう思っても、この衝動的に込み上げてくる感情を、抑えることはできなかった。

…あなたをいつか、手に入れたい。身分違いも甚だしいと分かっている。

けれど、いつか…きっと…。

「何だと……それは真か！」

菊姫が輿入れして六年という歳月が流れた。大久保家に緊張の嵐が吹き荒れていた。

大久保家だけではない。大久保家が仕える大名家もまた、困惑していた。

菊姫が嫁いだ家臣の主人である、同盟国の大名が大久保家の主人を裏切ったのである。

大久保家の主人は、つまりは三村家にとっても主人というべき存在。大久保家広間に集った主人と家来たちの前で、大名家からの伝令が、戦の準備をせよとの報告とともに、裏切りという情報を持ってきたのだ。

（姫様がいる国と、この国が戦……！？）

それは、元信に”好きな人の国を潰せ”と言っているようなものである。

この戦に勝利しても、菊姫が無事こちらの国に戻ってくることが出来るという保証もない。

（姫様…！）

一途な想いも虚しく、戦の日はやってきた。ある家臣の屋敷内で、女の声が木霊している。

「なぜです！なぜ父のいる国を裏切ったのですか！？」

菊姫、いやお菊の方の声である。動揺していたのは大久保家だけではなく、菊姫もそうであった。

自分の部屋で、自分の侍女に怒りをぶつける。

「なぜ！この国は私の故郷を裏切ったのです！」

しかし、菊姫の憤りは、決してこの国の大名に届くことはなかった。

止められなかった戦を前に、彼女もまた元信のことを想いながら、彼が戦で死なぬよう祈り続けた。

戦は刻一刻と激しさを増し、もうじき終わるだろうと思われる頃には、大量の死者が出ていた。

戦は思っていた以上に、大きいものだったのだ。

（元信…！）

隣国に嫁いでも、菊姫は彼のことを忘れていなかった。

もう六年にもなるが、幼い頃から想っている人のことを、そう簡単に忘れられるはずもなく。

ただ、彼の命運を祈って…。

戦は終わった。負けたのは大久保家側の大名家であった。

落城した大久保家の大名は城内で命を落とし、大久保家の主人もまた戦死した。

しかし、三村元信は生きながらえ、他家の家臣たちとともに他の国へと落ち延びていたのだ。

それを知る術もない菊姫は、自身の父親が戦に命を散らせたこと、また自身の故郷が敗れたことに喪失感を覚える日々を過ごす。

（きっと…元信もあの戦で…）

元信は生きている。しかしそれを、菊姫は知らない。

菊姫が自身のことを案じている。しかしそれを、元信は知らない。

この二人は年老いるまで生きた。互いの想いを全うしながら。

晩年の元信は自身の生涯をこう綴った。

——私の生涯は、ただ一人の姫のためにあり。

元信は同じ主人の家来一族から養子を貰い、生涯独身だった。

自分の生涯の恋心を、ただ一人の女性に明け渡して…。

いつか、彼女を手に入れる。その日のために、想いを馳せて…。

（くだらない…）

煩わしい夢から解放された黄楊は、広葉の顔を思い浮かべた。

彼の前世は兵隊だったという。皮肉なことに自分の前世もまた、戦場に向かう武士だった。

そりゃあ、動乱の世で想い人と平和に過ごせるカップルなんてそうそういない。

だからこの平和な世界で、前世の人と結ばれたいと願う気持ちは分
からなくもない。

けれど。

（広葉…もう、解放されないか…？）

自分も解放されたように、古い翼を捨てて、新しい翼で羽ばたいて
…。

現世で出会った素敵な女性と、結ばれて。

いつか二人で、笑い合おう…。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3509y/>

Winter Waver

2011年12月6日15時46分発行